HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中国語の結果補語構造における下位カテゴリーの研究 ： ＜限界性＞の観点から［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	楊, 安娜
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12515号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65455
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Yang_Anna_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　楊　安　娜

学位論文題名

中国語の結果補語構造における下位カテゴリーの研究――〈限界性〉の観点から――

本論文は、中国語における基本的な統語構造の一つである「動詞―結果補語構造」（verb-resultative construction、以下「VR 構造」と称する）を考察したものである。まず、VR 構造が〈限界性〉の異なる複数の下位カテゴリーからなるという仮説を提出し、その仮説に踏まえた上で、従来未解決であった種々の文法現象の解明を目論んでいる。

序章では、まず VR 構造の上位構造である動補構造について、その定義や分類に関わる基礎事項を整理し、VR 構造の動補構造における位置を確認している。

そして第 1 章では、VR 構造に関する先行研究において議論の焦点とされてきた問題点と研究成果とを紹介した上で、VR 構造の下位カテゴリーに関する研究状況、下位カテゴリーの内実を解明する意義について述べる。そして〈限界性〉という意味要素について定義を行い、中国語では結果補語(VR 構造における R)による〈限界性〉の付与が VR 構造の文法的振る舞いに如何なる影響を与えるのかといった問題が未解決であることを指摘している。そして、VR 構造の下位分類に関する先行研究を検討し、R による〈限界性〉の付与方法を基準とした下位分類を提示している。具体的には、[A 類] R が V の完成相を表すタイプ、[B 類] R が受動者の状態変化を表すタイプ、[C 類] R が動作主の状態変化を表すタイプ、[D 類] R が受動者・動作主以外の第三関与者の状態変化を表すタイプ、[E 類] R が V の表す動作行為の結果状態に対する評価を表すタイプ、という５タイプに分類した上で、〈限界性〉は A 類が最も高く、B 類、C 類、D 類、E 類の順で低下していくという仮説を提示している。

第２章は、上記５タイプの下位カテゴリー分類の有効性を証明する章と位置づけられる。VR 構造が従属節に生起する場合における動詞接尾辞“了”との共起関係に着目し、従属節における VR 構造の直後に“了”が生起する頻度は、原則的には上記５タイプの VR 構造の下位カテゴリーによって異なり、VR 構造の〈限界性〉が高いカテゴリーほど“了”が生起し難く、〈限界性〉が低いカテゴリーほど“了”が生起しやすいという関係がみられることを指摘する。

第３章では、VR 構造が主節を担った動詞コピー構文に生起する条件について考察している。当該構文の構文的意味を検討した先行研究の問題点を指摘した後、動詞コピー構文の類型を分析し、当該構文が、そのプロトタイプである「動作行為それ自体或いは動作行為に関連する事物の〈多量性〉を表す」非使役義動詞コピー構文と、「動作行為者にとって非制御的であり、なおかつ何らかの〈多量性〉を備えた動作行為によってある結果状態がもたらされるという因果関係を表す」使役義動詞コピー構文という二類の構文から構成されると主張する。同時に、両者にはいずれも動作行為の〈多量性〉を表すという共通性が見出されることを踏まえ、後者は、動詞コピー構文のプロトタイプである前者から、動作行為の〈多量性〉を表すという意味的共通性を基盤として、構文的意味の拡張により生成さ

れものであるとの仮説を提出する。さらに、主節を担った動詞コピー構文にVR構造が生起する条件について検討を加え、原則的には第１章で提示したVR構造の５タイプの下位カテゴリーによって条件が異なり、〈限界性〉の低いE類が最も生起し易く、〈限界性〉の最も高いA類が最も生起し難いこと、それと同時に動作行為の〈制御性〉という意味要素も関わっており、同じく下位カテゴリーのB類に属するVR構造である場合でも、〈制御性〉の低いものは生起し易く、〈制御性〉の高いものは生起し難い傾向が見出されることを指摘している。

第４章では、第１章で提示したVR構造の下位カテゴリーのA類の内部にまで立ち入り、いずれも〈完成相〉を表す機能を担う“V完”“V过$_1$”“V好”という個別のVR構造の生起条件の違いを論じている。そして“V完”は「一つの動作行為の内的展開に焦点が当てられ、当該の動作行為が終結する局面」、すなわち〈持続性〉を持つ前項動詞Vの内的展開が終結する局面を強調する場合に生起し、“V过$_1$”は「発話のコンテクストにおいて規定される上位イベントを構成する下位イベントのひとつが実現する局面」、すなわち二重のイベント構造が成立するという語用論的条件が満たされる場合に限り生起し、“V好”は「Vが〈価値のある事物や状態の出現が予想される〉という意味特徴をもつ達成動詞句であり、なおかつ“V好”が述語成分を担う文全体の表す事象が限界的で、その〈限界性〉を示す成分が明示されている」場合のみ、生起するのだと主張する。

第５章では、従来の研究で、VR構造の周辺に位置づけられていた“V到”構造をとりあげ、これをVR構造と方向補語構造との中間的構造とみなす立場から、“V到”構造と方向補語構造との相違を、限界的移動事象を表す場合に注目しつつ論じている。そして〈過程性〉、〈限界性〉、「副詞“正”、“正在”、“在”との共起関係」という三つの観点から検討を行い、“V到”が表す移動事象の〈限界性〉の程度は方向補語構造より高いこと、従属節に生起する場合には、〈限界性〉の程度の差が両者のアスペクト副詞“正”“正在”“在”との共起関係に影響を及ぼすことを指摘している。

第６章では、上述の内容を整理すると同時に、本論文では十分に論ずることのできなかった研究課題について言及している。

なお、本論文で独自に示された中国語の用例は、原則として北京大学漢語語言学研究中心の現代中国語コーパス（CCL）によるものと、中国語ネイティブである申請者による作例である。中国語用例の文法的適格性は、大連出身である申請者自身による判断の他、適宜、中国語を母語とする複数のインフォーマントによる判断を参照して行われたものである。